

# 学校点描

毎日のように、高校の受検担当の先生方が、学校説明のために来校しています。

《M中学校》

NO.9 H27. 11. 24

担当：教頭

2年生の東京修学旅行や3年生の仙台市上級学校訪問と、旅行的行事が終わりました。いずれの学年も、生徒みんながよい表情で学校に帰ってきたところを見ると、充実した活動ができたようです。東京修学旅行では、メール配信のできる限りその日の状況を2年生の保護者の方には画像入りでお伝えいたしました。



また、いじめアンケートへのご協力ありがとうございました。全てに目を通して、事の大小に関わらず、対応しております。兄弟の数が減り、地域での子ども数が減ったことで、子ども同士が自分たちでトラブルを解決する機会が減ってしまいました。私たちの子ども時代には、大人が知らないところで、子どもは喧嘩をし、仲直りをし、友情をはぐくんできた時代が確かにありました。

トラブルの渦中で悩みもがいている子どもを放っておくことはできません。ただ、その一方で、今後は子ども同士でもトラブルを乗り越えようとする生きた力もつけさせたいと考えます。

社会に出れば、行司や審判は、どこにもいない人間関係の渦に身を置きます。

## 先生の涙

わたしは、生まれも育ちも庄内の酒田で、今は、縁があつてこの最上に住んでいます。当時わたしの通った小学校は県で1番に児童数の多い学校でした。学校が終わると玄関にかばんをぶん投げて、再び学校へまっしぐらです。毎日、学校のグラウンドで草野球をするのが日課でした。あまり熱が入ると、夜遅くまで遊ぶのがしばしばで、次の日先生から罰として職員室前廊下でお説教を受けさせられるんです。そんな少年時代でした。だから、当時の草野球仲間はいっぱいいるんですが、今となつての交流は、ほとんどありません。たまに教え子達が同級会をするのを見るにつけ、羨ましく思ったりするものです。

ところが先日、小学校のその頃の友人から久しぶりに手紙が届いたのです。

実は、その友人は、小児麻痺で片足が不自由なのです。当時は、それが理由でいじめられたりしたものですから、小学校5年で同じ学級になったとき、担任の先生は片足が不自由な彼のため、体を動かす以外の遊びをするように、草野球好きのわたし達に話をしたのです。

そんな彼からの30年ぶりの手紙でした。

人間関係のトラブルは学年が上になるなるほど、少なくなる感じがします。それだけ、上級生までに、人との関わり方、他人との距離感みたいなものを学んできているのでしょう。

---

いじめで悩んでいる生徒には早急に解決に向けて働きかけます。ただ、それ以外のトラブルというのは、決して悪いことだけとは考えていません。その経験こそが、私たちであれば、昔、近所の子供とも思い違いで喧嘩したり、誤解されたことの悔しさから泣いたりした、あの経験を、今の生徒たちは学校という場で学んでいるということになるからです。

今日も、担任の先生は、一人の一人のおたより帳を見ながら、トラブルで友人関係が壊れた生徒たちの関係性を修復する作業をしています。これが、中学校の教員の大切な仕事でもあります。

先日、ある生徒は、壊れた友人関係が修復された後、笑顔でこうつぶやいて帰っていきました。「今度は、僕たちの手で、乗り越えていきたい」と。

---

少年時代のある日、夜遅くまで学校のグラウンドで野球をしていた私たちのもとに、血相を変えた顔つきで担任の先生がやってきたんです。「ああやばい。怒鳴られるな。」と思ったその時です。担任の先生は、私たちの野球風景を見て、黙って帰っていったんですね。後で、聞いたんですが、先生にとって、その光景はショックだったそうです。

なぜかって、わたし達はですね、足の悪い彼も交えて、野球をしていたんです。ルールは、彼が打席に入ってボールを打ったら、別の子供が代りになって走る、ただそれだけだったんですが…。

案の定、次の日、夜遅くまで遊んでいたということで、職員室前廊下に全員集合でお説教を受けました。

いつもと違っていたのは、先生が、泣きながら叱っていたことです

---

きりとりせん

|                 |
|-----------------|
| ご意見・ご感想をお願いします。 |
|                 |
|                 |

[Shinyatk1616n@yahoo.co.jp](mailto:Shinyatk1616n@yahoo.co.jp)